



Title	<書評>ダニエル・コーエン 著 『経済は、人類を幸せにできるのか? : <ホモ・エコノミクス>と21世紀世界』
Author(s)	武内, 真美子
Citation	国際公共政策研究. 2016, 20(2), p. 137-140
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60484
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書評】

ダニエル・コーエン著／林昌宏訳

『経済は、人類を幸せにできるのか？
—〈ホモ・エコノミクス〉と21世紀世界』(原題：Daniel Cohen, *Homo Economicus: The (Lost) Prophet of Modern Times*)

東京：作品社、2015年、243頁、ISBN 978-4861825392

武内真美子*

Mamiko TAKEUCHI*

この著書のテーマは「幸福」であり、幸福感を経済学をベースに、心理学、政治、哲学、テクノロジーなどの観点から解説されている。特に「幸福」のパラドクスが事例を用いながら解説されている点が興味深く、読者に読みやすい内容となっている。

「経済と幸せの関係を見直すために」という前書きでは、「先進国は豊かになったのに、なぜ幸せが実感できないのか？」という疑問が提起されている。現代では、この世の幸せこそ人類の目的かもしれない。獲得してもすぐに失われてしまう「幸せ」という目的を、絶えず課してくる社会のパラドクスについて、いかなる進歩が達成されようとも、それらがすぐに日常的な出来事になってしまう人間の適応力が挙げられている。しかし、われわれは、そのメカニズムを理解する必要がある。このような問題提起から始まるこの書物の章立ては、以下の通りである。第1章「経済にとって人間の幸せとは？」第2章「失われる労働の魅力」第3章「アメリカンウェイオブライフの崩壊」第4章「台頭する新興国は幸福になったのか？」第5章「グローバルゼーションは幸福をもたらしたか？」第6章「技術革新は人間を進化させるのか？」第7章「21世紀世界の幸福とは」。このうち、本稿では第1章、2章、5章、6章、7章の中のパラドクスの事例をまじえながら本書を紹介する。

人間は他人の不幸に接すると心から泣けると同時に、自分より成功した者には嫉妬する。例えば、アメリカの大学生に対する心理的実験が引用されている。1) クラスメートが20万ドルを稼いでいるが、自分は10万ドルしか稼げない。2) クラスメートが2万5,000ドルしか稼げないのに、自分は5万ドルを稼げる。の2つの選択しが提示されれば大学生は2) を選択する。幸福感は、友人や同僚などの指標となる集団との比較に左右される。しかし、余暇については敵対関係は観察できない。

* 九州大学男女共同参画推進室准教授

同様に、1) あなたには2週間の休暇があり、あなたの同僚には1週間の休暇しかない。2) あなたに4週間の休暇があり、あなたの同僚には8週間の休暇がある。の2つの選択肢があれば、学生全員は4週間のバカンスに出る2)を選択した。敵対関係は人目につく社会的成功の特徴だけに作用する。他人の物静かな余暇という幸福によって、人間の敵対心がかきたてられることはないと解説されている。言い換えれば「外在的な財」と「内在的な財」を区分し、内在的な財つまり愛や人生に目標を持つ気持ちなど、他者の愛情と関係のあるものは時間の経過とともに「移ろいやすい」財であると同時に、幸福感を静かに高めるのである。同時に、人間は内在的な財の効用を過小評価することも指摘されている。行動心理学の例から「人の記憶に残るのは、最も強烈な瞬間と終了時であり」休暇を例に取れば、駅のホームに戻った瞬間が最も強烈な瞬間で、他のことは日常の雑事にまぎれて記憶から消え去る。日常の静かな感情を記憶に留めるのは難しい。なんともないようなことなので忘れてしまったと思われる時間こそ重要なのではないかということが、ここでは指摘されている。

一方では、人は将来の所得増を常に夢見るが、所得増が実現してもその増加量では満足しないのは、現在の願望が将来は変化することを考慮しないためだと指摘されている。幸福とは、「理性だけでなく想像力による理想郷」と表現されている。人間の幸福のレベルはほとんど変化しておらず、幸せな人と不幸な人の割合は驚くほど安定的であるという。しかし、幸福のレベルに一環して影響を及ぼす変数は存在する。幸福と年齢の関係はUカーブを描き、若年層と高齢者層の幸福感は、その中間の人間よりも大きい。年をとると無駄な財を蓄積するという重圧から解放され、そこに内在的な財を取り戻すかもしれないと述べられている。哲学者によれば、幸福はよい暮らしの結果であるが、よい暮らしの目的ではない。

「離婚」と「失業」はその人の幸福感を著しく低下させる。離婚と失業は現代の最も顕著な特徴であることは明らかであるが、この2つが同時に急増したのは、われわれが不幸を増やす出来事を増加させる社会を作り上げたのかもしれない。自分の雇用が安定していると確認している労働者は、そうでない労働者よりもはるかに幸福だと感じているという。90年代以降社会的格差は新たな領域に突入しているが、「取締役の報酬は、ほぼ主観的に決まる。さらには流行の影響を受ける」「経営者の報酬の増加は、経済的な出来事である以前に社会的な出来事」である。「権力や富を持つ者たちから、自らの社会的地位を示す文化的・心理学的な指標が次第に消え伏せた」と記されている。つまり、今後は富さえあれば満足できる域に到達していることが指摘される。

昔が平和だったと感じるのは、現在よりもシンプルだったからだ。どの世代でもそう考えたことがあるだろう。しかし、複合性は「自然なこと」と考えるのは間違っている。人間は自分たちが引き起こしたりリスクの台頭に持ちこたえられないこともある。文明が発生させた環境の問題を解決できないために消滅した例がこれまでもあるように、科学は移ろいやすく、国を管理するのは、将来の危機を予見することよりも、今日の国民の不安を減らそうと焦る政府がある。人類学的な尺度で世界の将来を考察しなければ、責任感のある共同体として世界をきちんと管理することはない。

グローバリゼーションはハイブリッドなプロセスである。テレビによって人々は個人主義的になり、社会的格差を容認するようになった。今は、ソーシャル・ネットワーキングサービス（SNS）が公共空間を変革している。SNSは、市民意識を復活させるかどうか。今日、インターネットには相反する2つの傾向があると指摘する。一つはテレビであり、もう一つは電話に例えられる傾向である。フェイスブックがもたらしたイノベーションは、当初過小評価されていたが、デジタルの世界ではプライバシーが後退した。「自分のことを忘れてもらう」権利が失われた。20歳の時に参加したパーティーの記念写真が生涯ついて回ることになる。デジタルな世界では利用者は常に他者の視線にさらされる。インターネットに費やす時間は孤独と不満に正比例するが、インターネットを利用して孤独感が和らぐわけではない。このような社会で重要なことは勝ち負けだけではなく「社会で頭角を現すことだ」と指摘されている。他者の前で自分の人生を構想するという新たなやり方が具体化される。

ヒトゲノムの読み取りは20世紀末の重要な出来事だった。DNAの鎖が持つ情報であり、2時間の映画に匹敵する情報量である。今後誰もが自分の全ゲノム情報が入ったDVDを提出できるようになれば、匿名履歴書を推進しても徒労に終わるだろう。人口知能は人間の知能に追いつく日も遠くないと予想される。「体や脳にもたらされるいかなる加工も、次世代に遺伝してはならず、次世代の人間に影響を及ぼすことがあってはならない」という歴史家の言葉にあるように、劇的な変化のあとには、人類は率先して正しい行動ができるかどうかという人道的な問題に直面するだろうと述べられている。

19世紀初頭に機械が導入されると、労働者はお払い箱になるため、機械は労働者を貧困に追いやると予想されたが、この予想に反して、機械の導入は、労働者の賃金を上昇させた。これは機械が人間の生産力を増強させたため、機械を利用する人間はさらに稼ぐようになったためである。経済史に照らし合わせれば、今後人間をより効率的にする道具が登場すると予想できる。

情報工学は労働の負担を減らすのではなく、むしろ複数の作業を同時にこなさなければならないストレス要因になったと指摘されている。効率的という定義が恐ろしいものになる可能性がある。

訳者のあとがきにあるように、「真の幸福」とは、先進国のような成熟社会では「地道に自己鍛錬する過程で期待を抱きつづけられる状態」なのかもしれない、いろいろ理屈を並べたところで長い検討や多様な概念に捧げる時間もない人々にとっては、幸福だと実感できるのはやはり「経済成長」なのかもしれないが、今以上に経済的価値がある物理的環境が必要なかどうか考える時代であることも確かだと感じる。

幸福のパラドクスの真髄は、幸福が「よい暮らし」の結果であり、「よい暮らし」の目的ではないところにある。第1章でブルーノ・フライの人生訓が紹介されている。1) 自分が天才でないことを悲観するな、2) お金を稼げ、3) 優雅に年をとれ、4) 自分の容姿を他者と比較してはいけない。5) 神・社会主義・自然美など、何か信仰をもて、6) 他者の手助けをしろ、7) 自己の欲求を制御せよ、8) 友人を大切にせよ、9) 誰かと一緒に暮らせ、10) 現実を認め、自分の弱点を理

性的に管理せよ。現代の社会で快適に暮らすために必要な努力はいつの時代も変わらないのかもしれない。